

# 大日本帝国憲法と森鷗外

蓮 沼 啓 介

## はじめに

森鷗外と大日本帝国憲法の関係ははっきりしない。憲法発布の数日前に発行された『東京医事新誌』の緒言には主筆である鷗外の手で憲法発布の悦びと昂まる期待が次の言葉で余すところなく伝えられている。

「明治二十二年二月十一日ハ実ニ千載ノ一遇トモ謂フベキ秋ナリ我毅明ナル天皇陛下ハ憲法ヲ発布シテ歴史ニ特筆スベキ第一着歩ヲナシタリ余等医人モ亦タ此時ニ遭フテ此運ヲ見ル默然トシテ止ム事能ワザルナリ」

大日本帝国憲法が発布され、新日本の船出が決まってから二週間の後に鷗外は仮祝言を挙げている。縁談の相手は赤松大三郎こと則良の娘である登志子である。目出たい船出である。西周が媒酌人であった。「林の嫁はあれにかぎる」（「衛生学」）と持論を切り出している。だが結婚式には媒酌人であった西周は別に仲人を立て自分は欠席した。わけありであることをそれとなく示したものである。「御婚礼の日には、私は風を引いて出ませんでした」（「花園町の家」）と妹の小金井喜美子は回想している。喜美子には気がかりなことが実はあった。もしあの女の人のことを尋ねられたらなんと答えよう。風邪を引いて欠席の言い訳ができて却って安心であった。

帝国憲法と鷗外の蜜月は長くは続かず、次第に鷗外は批判の語気を強めて行く。まずクロムウェル伝の翻訳を始める。鷗外は抗議派の思想と運動に関心

を強めて行く。続いて『しがらみ草紙』を発刊し、同時に『東京医事新誌』の主筆として健筆を振るう。こうした文筆活動と夫婦生活の両立は難しくこの結婚は長続きせず、翌年十月には破綻している。嫁姑の戦いの場から森林太郎は逃亡してしまう。文士森鷗外の誕生の瞬間である。

帰国した際の瞬間には全てが円満に動いているかの如くであった。

妹である小金井貴美子の回想である「兄の帰朝」にはこうある。

「兄が洋行から帰られたのは、明治二十一年九月八日のことでした。家内中が幾年かの間待暮していたのですから、その年も春が過ぎてからは、その噂ばかりしていました。（中略）

祖母は夫が旅で終わった遠い昔を忘れないので、「旅に出た人は、その顔を見るまでは安心が出来ませんよ」といわれます。母は「そんな縁起でもないことを仰しゃって」と嫌な顔をなさいますが、心の中では一層心配していられるのです。（中略）

私は早くから千住の家へ行って待っていました。兄はあちこち廻って帰られたので大分後れましたけれども、どこかで連絡があったと見えて、橋井堂医院の招牌のあるところから曲がって見えた時は、大勢に囲まれてお出でした。土地柄でしょう。法被を着た人なども後から大勢附いて来ました。そして揃って今日の喜びをいうのでした。父がその人たちに挨拶をします。気の利いた仲働が、印ばかりの酒を出したようです。家の中では、古い書生たちまで

集まって来て喜びをいいます。祖母は気丈な人でしたけれど、お辞儀をただけで、涙ばかり拭いて、物はいわれませんでした。私はそれを見て、同じように涙が止まりませんでした。父はにこにこして煙草を吸われるだけ、盛んに話すのは次兄一人です」

兄の無事を目の当たりにして一家を挙げて安堵感に浸りうれし涙に泣き濡れている様子が描き出されている。

四日後の9月12日には陸軍軍医学会の主催する帰朝歓迎会が偕行社で開かれた。鷗外は石黒忠恵と一緒に出席して石黒の演説のあとに挨拶した。石黒の演説草稿をみると鷗外の真似をするなど釘をさしていることが分かる。

「洋行者ガ帰ルト學術ハ勿論其風ニ至ルマデ少壯輩ハ之ヲ学ブヲ常トス。森氏ノ風ニ於ケル余ハ諸君ガ之ヲ学ブヲ欲セズ。何トナレバ余ノ見ル所ニヨレバ独乙士官ノ風ニアラズ。寧口独乙ノ風流家ノ風多シトモ言フベキカ」

帰国の船中の鷗外は次第に活気を取り戻して、石黒忠恵には危険な兆候が見て取れたからである。軍人の気風というより文士の気風を身につけて帰国した。これが石黒忠恵の見立てである。一方で石黒忠恵は森林太郎の仕事振りをこう紹介している。

「同氏は・ライプツヒヒ大学ニテ衛生専門科プロヘッソルホフマン氏ニ随キ、次ニ、ミュンヘンノ専門科プロヘッソル、ハッテン・コーヘルニ随キ、次ニ伯林ノ専門科、特ニ菌学ニ有名ナルコッホ氏ニ随フテ専ラ衛生学ヲ修シ、ソノ間、サクソン国ドレスデンニテ軍医監ロート氏ニ随フテ軍陣医学ト軍隊勤務ノ事ヲ学ビ、野営に従事シ、且、本年ハ普国近衛歩兵第二連隊ニ附セラレテ、其隊附勤務ヲ服シタ

リ」<sup>(1)</sup>

鷗外の挨拶の中味は不明であるが、おそらくはドレスデンにおける野戦訓練の体験談とベルリンにおけるプロイセン軍医としての仕事振りを話したと推測される。自分は只の文士輩とは違って軍務もきちんとこなしていることを体験談を通して強調したに違いない。鷗外はさりげなく石黒よりも自分の方がドイツ通であることを示したと推測される。<sup>(2)</sup> まもなくエリーゼが横浜に着く。鷗外の心根は固まっていた。

## 1. ドイツ婦人の来朝

鷗外こと森林太郎が足掛け五年に亘るドイツ留学から日本に帰って来たときに、一人のドイツ婦人が鷗外の後を追うかのように横浜を訪れた事は今では良く知られた事実である。一人のドイツ人女性が鷗外を追ってプレーメンから途中、香港で船を乗り継いで横浜までやって来たのである。

事実は関係者の回顧録に明らかである。

妹である小金井貴美子の回想を綴った「兄の帰朝」の続きにはこうある。

「兄が洋行から帰られたのは、明治二十一年九月八日のことでした。(中略)。そうして九月もいつか二十日ほど過ぎた或日、独逸の婦人が兄の後を追って来て、築地の精養軒にいるという話を聞いた時には、どんなに驚いたでしょうか。婦人の名はエリスというのです。次兄がそのことを大学へ知らせに来たので、主人は授業が終るとすぐ様子を聞くために千住へ行ったという知らせがありました。さあ心配でたまりません。無事に帰朝されて、やっと安心したばかりなのに、どんな人なのだろう。まさか話らない人と知合になどとは思いますが、それま

(1) 石黒日記、第四巻巻末。国立国会図書館、憲政資料室蔵。竹盛天雄「石黒・森のベルリン淹留と帰朝をめぐって」(上)、文学43巻9号。昭和五十年9月号参照。

(2) 「偕行社にて衛生部将校に告ぐるの一節」という一文が残されているが、これは宴会の席上喝采と共に演説を望まれた際に咄嗟に語った断りの一文を後日書き残したものであろう。「発表誌未詳」とある。鷗外全集、第二八巻、岩波書店、1975年、後記、601頁参照。石黒の演説に対して嫌みを利かし仄めかした一節である。

で主人の知己の誰彼が外国から女を連れて帰られて、その扱いに難儀をしているのもあるし、残して来た先方への送金に、ひどくお困りなさる方のあることなども聞いていたものですから、それだけ心配になるのです」。

小金井喜美子はドイツ婦人のことをエリスと呼んでいる。『舞姫』の女主人公であるエリスと同一の名前であるという仮定に立つ名称である。弟である潤三郎の『鷗外森林太郎』の記事その他も同様である。

喜美子の夫である小金井良精の日記をみてもドイツ婦人としか見えない。その実在は間違いない。だが実名は分からない。鷗外が意図的に実名を隠してしまったとしか考えられない。

長くこのドイツ婦人が何者であるか、謎のままに置かれていた。

その実名が判明したのは大分後の出来事である。1981年に船名から乗客名簿の調査を行うことができた。

「十月十七日になって、エリスは帰国することになりました。だんだん周囲の様子も分かり、自分の思っ違えていたことにも気が附いてあきらめたのでしょう。もともと好人物なのでしたから、その出発については、出来るだけのことをして、土産も持たせ、費用その外の雑事はすべて次兄が奔走しました。前晩から兄と次兄と主人とがエリスと共に横浜に一泊し、翌朝は五時に起き、七時半に艀舟で本船ジェネラル・ウェルダールの出帆するのを見送りました。在京は一月足らずでした」

1981年になって船名が判っているので船客名簿を探し求めて英字新聞を調べたところ船客の記事が見

つかった。横浜で発行された英字新聞である「ジャパン・ウィークリー・メール」の十月二十日号に十月十七日に出港したドイツ汽船ゲネラル・ヴェルダール号の船客名簿が載っていて、その中に「Miss Wiegert」という名前が発見された。続いて九月十五日号の紙面に載ったゲネラル・ヴェルダール号の一等船客の中に「Miss Elise Wiegert」という名前のあることが判明した。<sup>(3)</sup> エリーゼ・ヴィーゲルトがそのドイツ婦人の実名である。エリーゼとは何者なのか。

ところがWiegert姓は少なく、Eliseは簡単には見つからなかった。かくてWiegert探しが始まる。住所録を点検すると二人のWiegertが発見された。ルイーゼとエリーゼである。

<sup>(4)</sup> まずルイーゼ・ヴィーゲルトが発見された。

1888年版ベルリン住所録のコピーを見るとWiegertは一世帯しか登録されていない。世帯主がF. Wiegertである。職業はSchneiderとある。既製服屋ないし仕立物師である。1890年版住所録にはEという所有者を示す略字があり、1889年中に登記簿の変更が行われている。相続人の一人に1872年12月16日生まれのAnna Wiegertが含まれていた。

だがアンナはルイーゼであってエリーゼではない。名前が違う。人違いである。調査は行き詰まり、袋小路に入る。

<sup>(5)</sup> エリーゼを探し出したのは六草いちかである。

1898年版ベルリン住所帳にWiegert, E.の名前が

(3) Elise Weigertとする記事もあった。『舞姫』の女主人公の名はエリス・ヴァイゲルトであったから、Elise Weigertが本名であるという説も一時流された。郷ひろみ主演の映画もこの頃作成された。しかしこの記事は誤植である。

他の記事ではすべてElise Wiegertとされている。

(4) 植木哲『新説 鷗外の恋人エリス』新潮社、2000年、76頁にAnna Bertha Louiseとある。今野勉が『鷗外の恋人 百二十年後の真実』NHK出版、2010年において追調査を試みている。

(5) 六草いちか『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』講談社、2011年

登録されている。プレーメン通りに住む。1899年版にはWiegert, Eliseとはっきり名前まで載っている。1894年版のベルリン住所帳には帽子制作者とある。クライネ・ポスト通り一番地に住む。<sup>(6)</sup>

しかも新たな事実が見つかった。エリーゼではなく妹のアンナ・アルヴィーネ・クララ・ヴィーゲルトが未婚で出産していた(62頁)。姉妹の母親であるラウラ・アンナ・マリー・ヴィーゲルトは1889年9月20日には再婚した夫や末の娘のエスベルスと一緒にカイザー・ウィルヘルム通り26番地に住んでいた。夫は管理人であった。鷗外の二度目の下宿の直ぐ傍であり裏隣りである。(六草, 207頁地図)。

姉のエリーゼが横浜までやってきたMiss Wiegertである。エリーゼ・マリー・カロリーネ・ヴィーゲルトがフルネームである。下の妹であるエスベルスの婚姻届には立会人としてエリーゼ・ヴィーゲルトの名前が見える。未婚, 36歳とある。1903年9月5日の挙式である。鷗外が再婚して一年半ばかり経った頃のことである。まだ未婚であった。

## 2. エリスのモデル

『舞姫』のヒロインであるエリスのモデルについて六草2013が画期的な発見をしている。エリーゼにはクララという妹がいた。しかもクララは身ごもって男子を出産している。これにより、エリーゼではなくて妹のクララがエリスのモデルであることがほぼ確実となった。クララが身ごもって男子を出産したという記録の発見は文字通りミッシング・リンク失われた輪の発見である。

こうしてみると森林太郎とエリーゼ・ヴィーゲルトの交際は清純な関係であった可能性が高い。同棲などしていない。<sup>(7)</sup>

エリスのモデルがクララであるとすれば太田豊太郎のモデルはその恋人であるはずである。森林太郎は姉であるエリーゼの交際相手であるから、いくらなんでもクララの恋人ではありえない。

それは誰か。

武島務ではないか。

まず武島務のことを調べると不思議なことが分かって来る。「独逸日記」を手がかりに武島務の動静を追跡すると記事が途中から消えてしまう。石黒忠恵が記した日記を見ると武島務の動静がかなりはっきりする。武島務は埼玉県秩父郡太田村の医師の子である。ドレスデンで死去している。

更に「政海の波瀾」という読売新聞への寄稿記事がある。独逸から送られた記事である。署名は「侘然居士」である。「侘然居士」とは何者か。鷗外もこの筆名を使っている。<sup>(8)</sup>

「政海の波瀾」は第四報までであるが明治21年の作品である。第四報は明治21年11月14日に掲載された。鷗外は既に日本に戻っている。鷗外の作品ではなさそうである。第三報は独逸帝の葬儀の様子を描く記事である。葬儀は6月18日にポツダムで実行された。記者は朝早く起きてベルリンからポツダムに出向き葬儀の行進を見物して記事にしている。鷗外の「隊務日記」を見ると6月18日にはベルリンで軍医の任務に当たっている。日記では独逸帝の葬儀にも触れているので、日付に間違いはない。つまり「政海の波瀾」を寄稿した記者と鷗外とは別人である。記事の日付は8月2日であり、葬儀の日から40日ほど後に新聞に掲載されている。これは船便で記事を送っているためである。

鷗外は他人の用いた筆名を平気で使用している。

(6) 六草いちか『それからのエリス』講談社, 2013年。45頁。

(7) ただし石黒忠恵から西周が聞いた話では二人の仲は相当深いということであったろう。清純な関係など石黒忠恵の想像力をはるかに越えた事態であったからである。

(8) 「シルレルが医たりし時の事を記す」「読売新聞の解停を祝す」「記憶」の三点である。鷗外全集付録, 月報35以下参照。

これは鷗外が筆名の人物が誰であるかを知っている証拠である。鷗外が発案者であって、友人に送った筆名である可能性もある。とすれば「侘然居士」とは誰か。<sup>(9)</sup> 6月3日にベルリンで撮った写真がある。鷗外の友人や知人の多くはこの写真に写っている。「侘然居士」もその中の一人であろう。その中に新聞や雑誌に記事を寄稿して生計を立てていた人物がいる。武島務である。とすれば「侘然居士」は武島務である公算が高い。

武島務がクララの恋人ではないだろうか。半信半疑の結論である。クララが出産したのは1888年10月29日である。以後「政海の波瀾」の寄稿は途絶えている。1889年の正月には武島務は学業不熱心で大学を除籍になっている。

赤子の世話に追われ、学業が疎かになったのではないか。

疑念は次第に確信に変わる。いくら調べても『舞姫』のエリスとエリーゼが重ならないのはエリーゼはエリスのモデルではないからである。エリスのモデルは鷗外の意中の人ではなかった。その妹であった。みんな鷗外に担がれていた。クララと武島務が交際していたとすれば、やがて二人は同棲してクララは身ごもることとなったとしてもおかしいことはない。<sup>(10)</sup> 『舞姫』の筋書きそのものである。

### 3. 鷗外とエリーゼ

西周が森林太郎と赤松登志子との縁談に乗り気であったのは確かであるが、姑になる森峰子の気性の強さを良く知っていたのに、嫁姑の諍いに何の心配も備えもしていないのはなぜか。仲がこじれたら森家の別家を立てればよいという考えであったろう。西周自身の経験が先例としてある。西周は弟の寿丸

を西家の跡継ぎに定め、自分は別家を構えている。西家は代々養子が跡を継ぐ家であった。西周の家も跡継ぎの紳一郎もその後の酉乙も養子であった。実子でも才能があれば跡取りになってもいい。

立身できる才能の持ち主は別家を構える方が才能を存分に発揮できるという考えである。林太郎が下宿していた際にその才能を身近に見極めていて、一種の天才教育を行っている。子供のうちからドイツ語を学ばせるために、進文学社というドイツ人教師のいるドイツ語中心の予備校に通わせている。森林太郎は年齢を水増しして医学校の予科に入学しているが、西周の差し金であろう。医学校に入ったのは医者への跡取りであり将来医者になる積もりであったからである。まだ子供であり父母の願いに林太郎が素直に自然に応えた結果である。森林太郎は出来のいい生徒でありすくすくと成長した。学業も優秀であった。

林太郎は出来がいいから森家の跡継ぎだけでは勿体ない。これが西周の考えである。

もしエリーゼとの出会いがなかったなら、西周の思惑通りに事は運んだに違いない。

エリーゼと森林太郎の交際はどのようなものであったか。『舞姫』からはほんの一部分しか知り得ない。『舞姫』はクララと武島務の悲しい恋の物語であって、森林太郎とエリーゼの交際はそこには殆ど反映されていない。

森林太郎の女性関係については石黒日記に確かな証言が残されている。石黒忠恵と谷口謙と森林太郎の交わした「懺悔話」つまり女性との交際話について石黒忠恵が「森最モ多罪」と記している。堅気の娘と交際する森林太郎の女性関係は相手の人生を傷つける恐れが多い点で罪が深い。これが石黒忠恵の

(9) 山崎光夫『明治21年6月3日』講談社、2012年、に写真に写っている人物の紹介がある

(10) なぜ帰国命令は取り消されなかったのか。武島務とその「情人」の交際に石黒たちが危惧を抱いていたからではないか。またドイツ娘を身ごもらせて私生児を産ませることになる。日本人留学生とドイツ娘の交際は困った結末に至りやすい。原田直二郎とマリーの交際もその例である。橋本春の場合や梅錦之丞の場合については六草2013、122～134頁を参照されたい。

心境であった。

森林太郎とエリーゼ・ウィーゲルトの出会いはお不透明である。鷗外のベルリンで二度目の下宿とエリーゼやクララの母親マリーの再婚先の住まいは直ぐそばにあった。角を曲がって三軒目の建物の管理人部屋に住んでいた。六草いちかの載せる当時の写真を見ると鷗外の下宿の裏庭とマリーの家の裏庭はつながっている様に見える。垣根ごしにお互いが見えるところに住んでいた。エリーゼが母親と同居していたかどうかは分からないが、別居していたとしても時々母親の家を訪れたことであろう。挨拶など交わしているうちに自然に交際が深まっていったものであろう。青年軍医と美人の姉妹が直ぐ近くに住んでいれば知り合いにならない方がおかしい。爽やかで無邪気な交際は石黒忠恵の様な古い男にはおおよそ想像の外であった。<sup>(11)</sup>

1887年9月15日にエリーゼが二十一歳になった誕生日祝いがある。鷗外の下宿の直ぐ裏にあったエリーゼの母の家かどこかで開かれた筈である。妹のクララも居たに違いない。隣近所で顔見知りの森林太郎もそこに招かれたと推計して置きたい。<sup>(12)</sup>

「独逸日記」にはエリーゼに関する記事は見当たらない。和文に直した際に隠したに違いない。三度目の下宿に移ってから交際を深めたことも推定される。「隊務日記」を毎日記録しているが、勤務の記録だけで、勤務後の行動については何の記録も残していない。おおむね八時半から五時半までの勤務であった。鉄道馬車で出勤する。帰りも鉄道馬車でまっすぐ下宿に帰る。するとエリーゼも仕事を終えてやってくる。二人して夕食に出かける毎日であったろう。春先のベルリンは次第に夜が短くなるし初夏のベルリンは日が長く夕方は過ごしやすい。たわ

いもないおしゃべりに興じる。芝居を見たりダンスに行ったりカフェに居座ったりする。きらきらと輝く青春の日々が続く。ドイツ人に成り切っている。森林太郎はどっぷりとドイツ人社会に溶け込んでいる。「えぼれつと かがやきし友 こがね髪 ゆらぎし少女」エボレットはプロイセン軍の将校の着ける肩章であるし、金髪少女とはまだ初々しいエリーゼのことである。

#### 4. エリーゼのために

1888年7月5日に石黒忠恵と森林太郎の一行はベルリンを発ち、アムステルダムへ向かった。「車中森ト其情人ノ事ヲ語り為ニ愴然タリ後ニ互ニ語ナク仮眠ニ入ル」(石黒日記、21/7/5)とある。

試みに石黒忠恵と森林太郎の列車内での会話の内容を推計する。

—— 石黒忠恵は森林太郎と「情人」女友達の事を話し合っただけで真っ青になった。エリーゼが日本に来るかもしれないと聞いて石黒忠恵はびっくりした。そんな馬鹿な。第一船賃が出せないだろう。日本に来られる筈がない。鷗外はこう説明した。臨時手当を全部エリーゼに贈った。何と言う男だ。石黒忠恵は唖った。お針子風情にせつかく稼いだ臨時手当の全額を渡してしまうとは。非常識にも程がある。鷗外はこういった。プロイセンで稼いだ手当はプロイセンの女に贈るのがいい。こうすればエリーゼの生活も多少は楽になるし、妹のクララが身ごもっている子供の養育費にも使える。誰の子だ。石黒忠恵は咳き込んで訊ねた。いくら何でも妹にまで手をだして子を孕ませたりはすまい。鷗外の答えは衝撃的であった。武島務の子だ。あいつか。石黒忠恵の不安が的中した。だから日本に帰れと命じたのに。また私生児か。うんざりする思いであった。それでその女は本当に日本に来るのか。まだ分からない。鷗外

(11) 「多木子」と日記にある。森林と太郎をはしょって名前を書くとき無闇やたらに木が多い。気が多い女好きな奴だという意味を込めて「多木子」という符牒を石黒忠恵は好んで用いるのである。

(12) 武島務も一緒であった公算が高い。

の答えには力強さが感じられなかった。別送品を載せた船に乗れば香港で船を乗り換えて横浜までいけると手紙に書いて置いた。生田益雄が帰りに乗る船だから、相談したらいいと生田の連絡先を教えてある。僕らの日程と滞在地を示す旅行の手配書も同封して置いたから、船に乗ればその旨の知らせが来る。

石黒忠恵にはなにも言う事がなかった。なんという奴らだ。「森最モ多罪」。

なんとも罪が多いことをしてかすものだ。森林も武島も同罪だ。

鷗外も不安であった。エリーゼはドイツに止まるだろうか。それとも日本にやって来るだろうか。ドイツに止まってくれる方が簡単であった。美しくも楽しい思い出を胸に遠く離ればなれの人生を送る。二人は永遠の恋人となる。鷗外はそう願っていた。自分が望んではいない方向に事が進む方が万事安心できる。とすると自分は危険分子の一人なのかもしれない。鷗外もまた言葉少なになって車中には沈黙が訪れた。やがて二人の寝息が洩れ始めた。夜汽車はアムステルダムに向かって疾走した。

やがて出港の連絡が届く。「今夕多木子報曰其情人ブレメンヨリ独逸船にて本邦ニ赴キタリトノ報アリタリト」(石黒日記21/7/27)

この日二人は一行とともに午後七時五分発の列車でパリからマルセイユに向かった。夕方知らせが届いたという話が森林太郎からあった。女友達から独逸船に乗って日本に行くという連絡があったという。石黒忠恵には意外であった。森林がおとなしくもの静かであったからである。もう好きにするがいい。何が起きてもう俺は知らない。独逸女のことは石黒忠恵にはよく分からなかった。一年間付き合った蒼山というフランス人娼婦の気持ちなら自分にも分かる。だが独逸女のことは分からない。大金を渡す森林も頭がおかしいが、そうした大金を惜しげも無く使って森林を追っかけて日本にまでやって

くるという女も気心が知れない。もう手がつけられない。放って置くしか無い。

日本に行く。パリのホテルでエリーゼからの知らせを受け取って森林は安堵していた。覚悟は決まった。まな板の鯉である。日本に着いたらエリーゼと結婚したいと両親に話す。陸軍省にも国際結婚の許可を申請する。森林の決意は固まっていた。ドイツ社会にすっかり溶け込んでいた森林には前途の多難がまだ見えていなかったのである。

鷗外は帰国した9月8日の晩にエリーゼのことを父である森静男に告げている。エリーゼは9月13日に横浜に着く予定であった。まず縁談を断りその上で結婚の承諾を母から得ることを目指す。これが鷗外の見論であった。9月10日の午後には西周夫妻が森家を訪れ、赤松家との縁談をあらためて持ち出し、返答を急ぐように申し入れた。「林の嫁はあれにかぎる」。あれとは赤松家の長女の登志子のことである。9月12日には鷗外の荷物と一緒にエリーゼも横浜沖に到着した。鷗外は出迎えと荷物の受け取りに翌日横浜港に向かっている。

エリーゼは築地の精養軒のホテルに宿泊した。鷗外の采配であろう。

「帰路森ト閑談ス」(石黒日記21/9/15)。鷗外は三日後に陸軍大臣の大山巖に招かれ、その帰りに石黒忠恵に家族との話し合いの様子を伝えた。話は赤松家との縁談を断る方に進んでいた。9月17日には祖母の清子が西周の家に出向き縁談の「返却」(西周日記)を伝えている。まず縁談を断るという鷗外の狙いは的中した。だが強敵は家の中に居た。母の峰子と祖母の清子である。「あの時私達は気強く女を帰らせお前の母を娶らせた」。峰子は後に孫の於菟にこう語っている。やせ細っていく母の反対を前に鷗外はエリーゼとの結婚を断念せざるを得ない。母親ばかりか婆様にまで反対されては鷗外に勝ち味はない。万事休す、であった。

結婚の許可までは無理でもせめて婚約だけは果たしたいという鷗外の願いは叶わなかった。事態はこう進展した。「ただ普通の関係の女だけど、自分はそんな人を扱う事は極不得手なのに、留学生の多い中では、面白くなく家の生活が豊かな様に噂して唆かす者があるので、根が正直の婦人だから真に受けて、『日本に往く』といった」(次の兄)と鷗外が峰子に説明している。

鷗外はドイツでエリーゼときちんと話し合いをして別れる積もりであったけれど、自分は男女交際の経験が浅くて普通の女の人の扱いが不得手であるから巧く言えなかったと弁解じみたことを母親に告げているわけである。留学生の中にはたちの悪い不良がいて鷗外は資産家の息子などと出鱈目を言っていて、エリーゼに日本に行くことをけしかける連中がいたため、根が正直なエリーゼはその話を真に受けて日本行きを決意した。自分が招いたのではない。鷗外はこう語っているのである。ここで鷗外は不実であった。鷗外が母の峰子に隠していることがあった。それは鷗外が纏まった金額をエリーゼに贈ったから、エリーゼは鷗外の事をてっきり資産家の御曹司かなにかと取り違えてそう思い込んだといういきさつである。鷗外の母親に自分の真心を伝えることができれば、貧しい踊り子と銀行家の次男坊の恋を描いたハックレンデルの小説の如く結婚というハッピーエンドに至ることも夢ではない。こう信じることでできたエリーゼの決意は堅かった。母よりもエリーゼの方が大事である。これが鷗外の本心であった。稼いだ手当を全額エリーゼに贈る。この事実が何よりの証拠であった。鷗外はどうしても本心を母に打ち明けることが出来なかったのである。

## 5. 戦いの日々

エリーゼと鷗外が別れを決意した経緯はこうである。「踊りもするけれど」手芸が上手なので、日本

で自活して見る気で『お世話にならなければ好いでしょう』といふから、『手先が器用な位でどうしてやれるものか』というのと、『まあ考へて見ませう』とあって別れた」(次の兄)と鷗外が峰子に説明している。エリーゼは場合によっては日本で自活して暮らすつもりであった。鷗外と直ちに結婚できるとは初めから思っただけではなかったのである。婚約者として認めて貰えたら。これがエリーゼの切ない願いであった。だがドイツでならいざ知らず日本では手先が器用でも仕事がないから暮らせない。これが鷗外の見立てである。しばらく考えさせて欲しい。エリーゼにも鷗外の言う事が尤もに聞こえた。ドイツと日本は遠く離れた別の国であり、別世界であった。一旦ドイツに帰ろう。エリーゼは決意を固めた。

帰りの旅費を出して貰えれば帰国する。これがエリーゼの提出した条件である。ドイツに帰ったら帽子会社の「意匠部」に勤める約束をしてある。別れ際にエリーゼは鷗外にこう答えている。エリーゼはいまでいうデザイナーの卵であった。エリーゼは鷗外と婚約するために日本に来た。もともと直ぐに結婚できるとは思っただけで居なかった。まだ二十歳そこそこであり若いから結婚を急いではいない。モノグラムを贈るといふ古いベルリンの風習に従い、二人だけに分かる形で二人は婚約を交わした。ふたりはお互いの心の中で言い交わした仲であった。

ゲネラル・ヴェルデー号の出発は10月17日朝九時の予定であった。賀古鶴所と15日朝には会えなかった。横浜行きは予定より一日延ばすことになった。16日に午後二時四十五分発の汽車で横浜に向かう。横浜での滞在は慌ただしく過ぎた。あくる17日の朝五時に起きて七時半のはしけに乗って本船に渡り、エリーゼは船に乗り込み、皆ははしけからエリーゼを見送った。九時に本船は出港した。「舷でハンカチーフを振って別れていったエリスの顔に、

(13) 小金井喜美子「森於菟に」文学1936年、6月号



少しの憂いも見えなかった」(次の兄)と小金井良精はその日散歩がてら妻の喜美子に語っている。

挫折であった。失意の中に鷗外はいた。昼は軍医としてドイツ人兵士や将校と接触を重ね、夕はドイツ娘エリーゼと逢瀬を重ねる。ドイツ社会にどっぷりと浸かった三ヶ月半の間に日本の常識から掛け離れた地点に鷗外は流されてしまっていたのである。一方エリーゼは有頂天であった。往復の旅費は意中の人Rintaro Moriが全額払ってくれた。まるで新婚旅行であった。精養軒という高級ホテルにひと月ものあいだ続けて宿泊した。我が林太郎ぬしや可愛らしい弟さんに毎日のように会って食事や買い物と共にできた。しかもこれは夢ではない。モノグラムもその金型も愛しい人に手渡すことができた。これが本当の婚約である。これ以上の望みはない。エリーゼ・ヴィーゲルトは幸福であった。

「森林太郎来り本日例之人ヲ船ニ送り届ケタルコトヲ云フ」(石黒日記10/17)

鷗外は疲労困憊のどん底にいた。森林太郎は自分がどこにいるのか、もはや定かには分からない精神状態にあった。

鷗外を救ったのは皮肉な事に縁談であった。赤松登志子との縁談を受けることで森鷗外は全き自信喪失という人生最大の試練をかうじて潜り抜けることができた。縁談を受けることを鷗外に促したのは何であろうか。

「政海の波瀾」第四報が11月14日に読売新聞に掲載された。侘然居士という懐かしい筆名が紙上に躍っていた。伯林日報に載ったアントン・レーの演説を紹介する記事である。教育の宗派からの独立を主張する内容の演説である。「俄羅斯」オロシャの国ではギリシャ正教の司祭たちが私立学校の校則を左右して教育に介入するため、世道の頹廢が極まっ

ている。居士は宗派の教育への介入を嫌う。精神の自由を強調する居士の意見は鷗外のものであった。

武島務と恋人のクララを守らねばならない。そのためにも赤松家との縁談を受け、身を固める。赤松家との縁組みは立身出世にも都合がいい。多少は赤松の家から援助を戴き、その上で自分は武島務やクララを応援する。鷗外は結婚の意思を固めた。茫然自失の精神状態にあった鷗外の弱り切った心をうちから支えたのはベルリン時代の懐かしい友人でありその思い出であった。自分とエリーゼの仲を引き裂いた守旧派の壁を突き崩す。学術と文芸の両面で守旧派の壁を越える。鷗外の中の野生が目覚めた。野人鷗外が帰って来た。鷗外は戦う青年に戻った。

母峰子や石黒忠恵といった守旧派との戦いの火ぶたが切って落とされた。戦いは思想と精神の平面において発生する。心性と精神構造の改造が問題であった。発想の転換と知識の総入れ替えが主戦場であった。学術と文芸の大転換。それが鷗外の目標であった。文明開化という名の文化革命を指導した西周に代わって、森林太郎は新しい文明開化の旗手となった。精神の自由。鷗外の掲げた旗にはこの五文字が翻っていた。

穂積八東が『政法之理』を発刊した折には、鷗外はクロムウェル伝を寄稿している。<sup>(14)</sup>クロムウェルという抗議派の雄を持ち出して、信教の自由の旗を掲げたのである。信仰強制を意味する大日本帝国憲法の第三条に向けた公然たる抗議である。異議申し立てである。エリーゼは敬虔なるプロテスタントの信者であった。鷗外は抗議派と心情を共にしていたのである。

この年の十月に森鷗外は『しがらみ草紙』を創刊し、戦闘的な文芸批評を開始する。また留学帰りの新進気鋭として選ばれた『東京医事新誌』の主筆として、新知識の普及に当たってほしいという周りの

(14) 千葉俊二『エリスのえくぼ』小沢書店、1997年。II. 鷗外と「政法之理」を参照されたい。

予想や期待に反して、医療の経験や穏やかな意見の交換を旨とする懇親会に止まる医学会の現状を痛烈に批判し、橋本綱常や石黒忠恵を中心とする医学会の長老たちを糾弾した。そのため十一月には主筆の座を追われている。戦闘的な啓蒙の時代が訪れたのである。

危険を察知したのは母峰子である。峰子は次第に息子夫婦の生活に干渉し、干渉の手を深めて行く。峰子は開業医であった千住の夫と自分の家からしばしば下谷花園町の若夫婦の家に向向きそこに入り浸り生活の指南にあたった。峰子は若き文士を相手とする接客にしゃしゃり出た。花園町の家は文芸の戦士が集う戦場と化した。

そして『舞姫』の出版である。森篤次郎が「舞姫」の原稿を朗読するのを聞いて妹の喜美子は安堵の涙を流している。結末が悲しい悲劇になっていてお兄さまとその女友達の実話とは中味が随分と違う上手な作り話になっているので思わずホッとしたのである。鷗外の創作の力は確かであった。主人公である太田豊太郎のモデルは始まりの部分では森林太郎であるが、途中からモデルが武島務に早変わりする。帰国の船の中で悔恨の情を吐露し、生い立ちを語っている部分のモデルは森林太郎であるが、貧しい踊り子であるエリスと恋に落ち、職を失い艱難を重ねる部分のモデルは武島務である。太田の子を身ごもるエリスのモデルはクララである。『舞姫』は武島務とクララ・ヴィーゲルトの悲恋を題材にした創作である。エリーゼが妊娠したことはないと鷗外が自ら語っているので、喜美子は安心できた。太田豊太郎の信頼に足る友人である相沢謙吉のモデルは石黒忠恵と森林太郎である。もともと鷗外は軍医を目指した武島務の先生であり武島務は鷗外の学生であった。石黒忠恵は武島務の免官を決定した張本人であるが、辞職後の武島務の面倒も見ている。単なる上司に止まるのではない人生の先輩でもあった。

## 6. 破婚の深層

鷗外と妻登志子が破婚に至った真相は要するに嫁と姑のいさかいである。母峰子が若夫婦の所帯に過剰に介入し始めた結末である。嫁である登志子がお嬢様育ちでつましい森家の金銭感覚に照らすと金遣いが少々派手であったから、峰子には介入の口実ができたのである。鷗外はなぜ西周に相談しなかったのか。鷗外には西周の考えが予測できた。弟の篤次郎に森家を継がせ、林太郎には森家の別家を構えさせる。こうすればお峰さんとお敏は別居となり、家計の管理を巡る嫁と姑の争いは消失する。付き添いの老女を初めとする赤松家の関係者にも受け入れやすい解決法である。西周に相談すればこういう助言が来る。鷗外はそれを望んではいなかった。別家を構える位ならエリーゼと結婚したい。これが鷗外の本心であった。西周に黙って無断で赤松の持ち家を出る。第二人を引き連れて花園町の家から逃亡する。上級武士と下級武士との戦いが家の内部で日々行われる。赤松家というれっきとした武家領主の末裔と森家という地侍の間で戦われる歴史的な抗争に巻き込まれることを避けて第二人を引き連れて戦場を逃げ出して借家という安全地帯に逃散する。平民は戦を避けて逃げ隠れる。こうして鷗外は逃亡奴隷ないし遁世者あるいは剣の代わりにペンを執る平民文士の仲間入りをする。文人の一人になる。文豪森鷗外の誕生である。鷗外はこの日妻と子を捨ていわば出家した。明治廿三年十月四日の出来事である。

松本清張<sup>きよはる</sup>は森鷗外が『西周伝』を執筆した際に西周の文書をどのように活用したのかを調べ出すことに完全に失敗した<sup>(15)</sup>。伝聞に頼ったことが全ての失敗の唯一かつ最大の原因である。「二医官伝」はもともと司馬遼太郎が描いた明るい明治という時代が、松本清張が描いた暗い昭和という時代に変転し推移

(15) 松本清張『両像・森鷗外』（全集64, 所収）文芸春秋社。

する原因を陸軍内部の動向を通して解き明かす企てであったが、こうした歴史の秘部を描くには、橋本綱常と森林太郎の確執という視角に立つ作品が必要であった。橋本綱常は橋本左内の弟である。橋本綱常の長男である長勝は橋本春という幼名で「独逸日記」にも登場する。「綱常君よりはむしろ左内君に似たり」と石黒忠恵が語っている。1887/9/16条。「橋本春君モ鳥城ヨリ被參十四五日間逗留之積ニ御座候。兼而小生ヨリヤカマシク申遣候伯林賤女之一件ハ能ク吾言ヲ容レ今回愈手切ニ被致度候」小池正直書簡、石黒忠恵宛。明治廿二年四月十六日付け。鳥城はヴェルツブルグである。橋本春がベルリンに二週間ほど遊びに来たので、「伯林賤女」ベルリンにいる女友達とは手切れ金を払って別れるように説得したと小池は石黒に報告している。橋本春は女友達と別れることを強制され、過度の勉強も重なり気が狂ってしまい、結局、明治二十三年二月に生ける屍となり帰国した。<sup>(16)</sup>私生児の発生に陸軍幹部は手を焼いていたのである。

橋本綱常による石黒忠恵や小池正直を介しての息子の私生活への介入が橋本春を狂気に追い込んだ真の原因であった。森林太郎とエリーゼ・ヴィーゲルトの国際結婚を引き裂いたのも同一の力であった。将来自分の跡取りとして医務局長の地位に付けたい有望な息子がドイツ女と結婚したのでは万事困る。森林太郎や武島務の如き軽薄な西洋かぶれの連中の悪影響を受けなければいいのだが。これが橋本綱常の本心であった。橋本春の気が狂ったことを風のたよりに知った鷗外は『舞姫』の結末を悲劇とすることに決し、橋本春の苦しみと怒りと悲しみを込めて見捨てられたエリスを狂気に追い込むのである。

## 7. エリーゼとの別れ

浦島子の伝説を題材に鷗外が書いた『玉篋両浦嶋』という戯曲がある。玉くしげふたり浦島と詠

む。荒木志げ子と再婚した年の作品である。

万葉集に典拠をとっているので亀は登場しない。太郎と乙姫の物語である。

常世の国での楽しい日々が突然終わる。

「あの世」で暮らす太郎が「この世」のことを夢に見て、帰ると乙姫に告げるところから物語が始まる。エリーゼとの別れの辛さを主題とする戯曲である。「あの世」とはベルリンの日々である。毎晩エリーゼと逢瀬を重ね飲み歩いた青春の日々である。悲しみも苦しみもなく何の嘆きもない生活である。毎日が楽しい永遠の日々。この素晴らしい季節は鷗外とエリーゼの心の中では時を越え鷗外が再婚する時まで持続していた。『舞姫』は二人にとってはかけがえない時代を背景とする二人の直ぐ傍で生じた悲劇を題材とする小説である。明治二十二年の秋に鷗外は『舞姫』を書き始めた。ベルリンの思い出を永遠の相に刻み込んだ。そして「この世」での生活が戻って来る。二人の浦島。林太郎はもう一人の林太郎に変身する。荒木志げ子と再婚することはエリーゼと最終的に別れることであった。

太郎の後ろ姿はなんとも切なく乙姫の流す涙は美しい。

鷗外はその別れの辛さを芝居に描いた。鷗外の再婚を違約と捉えてエリーゼは白鳥の騎士ローエンゲリンのように愛する人の下から去って行く。エリーゼは結婚を決意する。真実の愛がかくて消え滅する。「こがね髪 ゆらぎし少女」はもう二度と帰ってくることはない。

浦島太郎は「この世」で自分の子孫である「後ノ太郎」に出会う。

後の太郎はいわば桃太郎であり八幡太郎である。浦島太郎の子孫は武家になる。鷗外は軍人に戻る。明治国家には忠誠を誓わなかったが、日本社会には溶け込んで行く。八幡神には仕える。小倉は宇佐八幡の直ぐ近くにありいわばお膝元である。化外の民

(16) 六草2011, 72頁。同2013, 125頁。

を教化し成敗する。石見の国はスサノウやオオクニヌシの故国である。ヤマトタケルが成敗した国である。鷗外はヤマトタケルの子孫の地位に立つ。森林太郎は精神の国ドイツから日常の国日本への帰国を漸く果たした。母峰子は漸く悪夢から目覚め、異国の女である「こがね髪 ゆらぎし少女」から息子を取り戻すことが出来た。

神功皇后神話はもの静かに大和撫子や大和男の子の心の底に深く長く根を下ろしているのである。日本国家からは自立した日本社会の持続。その原像がこの神話の底にくっきりと刻まれている。

## 結びに

「政海の波瀾」の発見により鷗外と武島務の失われた関係が見えて来る。特に第四報は鷗外の心を捉え内側から支えた。自信を喪失しかつ茫然自失の精神状態に落ちた鷗外の心をうちから支える力となった。野人鷗外の復活する瞬間である。武島務とクララ・ヴィーゲルトを助けなければならないという思いが鷗外に勇気を与えた。赤松登志子との縁談を受け入れた理由もここにあった。

結構可愛い人だし、育ちも良い。森林は割と気の多い青年であった。

しがらみ草紙の第一号にシラーが軍医であった時分の文筆活動の紹介を載せる。侘然居士の筆名を使って独逸に滞在する別人の筆と思わせる仕掛けを施す。戯曲『群盗』への隠れた自己批評の話と出版への経緯が綴られている。第六号にはシラーの逃亡の話が取り上げられている。シラーの逃亡の話を使って鷗外は赤松の持ち家からの逃亡の企てを暗に予告しているのである。

『文つかい』と『うたかたの記』はエリーゼが劇的な形で見せてくれたドイツ人女性の精神を解剖してみせた作品である。貴族と庶民を問わず精神性と決断力にその特性がある。一方『舞姫』は武島務とクララの悲恋を題材にとるが、同時に日本人青年の

心性を分析し、精神構造を解剖する企てである。女たちに対して心優しいがだらしがない。これが日本人青年である。心根は優しいものの意志薄弱であり、優柔不断と支離滅裂がその特性である。『舞姫』の始まりの部分のモデルは森林太郎であり、エリスと太田豊太郎の交際も自身の体験談を下敷きにした物語と錯覚させる仕掛けが施されている。巧みな創作である。虚構の魅力を満載する作品となる。エリスとエリーゼのギャップは『舞姫』が近代小説であることの証左である。実在と虚無を区別し、実話と作話を鋭利に穿つ。これが近代の精神である。その不足は鎖国の精神の産物である。鷗外が生涯を賭けて戦った近代以前の精神に見られる飛翔力の不足である。母峰子や上司である石黒忠恵が決して脱皮することができなかった守旧の精神である。守旧の精神を積み上げてその土台の上に聳えたつ明治国家にたいして鷗外は決して忠誠を誓うことはなかった。与えられた任務を黙々と果たしただけであった。その心の自由を決して手放すことはなかった。エリーゼの思い出は心の中に留め、死の床において写真や記録を焼き捨てさせている。石見の人森林太郎として死せんと欲す。天皇や明治国家への内心からの忠誠を拒否する宣言である。天皇に対する信仰強制の凄まじさは「かのように」に示されている。次第に五条秀麿の意識の内部に広がる結晶は信仰強制に圧迫されて発生する思考停止の症状そのものである。愛国ではなくて郷土愛を選択する。明治国家ではなくて日本社会を選択する。森鷗外は大日本帝国憲法の発布される以前の文明開化の精神に立ち、終生ドイツ的な精神の自由生きそれを守り切った人である。天皇を神聖な神と定める大日本帝国憲法（第三条）とはついに無縁な人生を送った精神の自由な人であった。